

F.W.A.フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の 教育方法学的検討

－「遊戯の歌」(42)－(50)に見られる子どもの「精神」の成長－

児 玉 衣 子

序

F. W. A. フレーベル (1782－1852) は、彼の創出した幼児教育を解説する唯一の単行本である『母の歌と愛撫の歌』(出版年記載なし。1844年頃とされる)において、彼の幼児教育の目的を「子どもを神の子として育て、育てて神の子とする」こととしている¹⁾。そして、その実現のための方法を、母親の口を借りて次のように述べる。「この子の身体や、四肢と感覚、心遣いや注意深さ、活動や奮闘の中に統一されている多様さと、それら全体がまとまったもの以外に何によってそれができるだろう；今まさに盛り上がりつつあるこの子の生き生きした自己感情、そう、心から生命に触れてくる、私や他者に対する時のこの子の人格的関係の持ち方—それはもうこの子どもにも区別できるようになってきている—；ようやく薄明るくなり始めたこの子の精神を認めてあげること、それ以外にないのではなかろうか。本当にこれ以外のことによって私の子どもの教育が行われるはずはない」。²⁾

このように、フレーベルは教育目的という大人の側の意図と子どもの発達とを対等、対置に位置づける。同時に、子どもの発達状況から幼児教育は出発することを明言する。さらにその際、特に教育的に配慮される子どもの発達を、上掲のように身体的側面、自己感情の成長と相俟っている他者との人格的関係の側面、精神の側面という3側面から捉えていることを明らかにする。

そこで、筆者は本書における子どもの身体的側面、他者との人格的関係の側面、精神の側面という順番に、本書中において子どもの発達の状況がどのように捉えられ、どのような教育的配慮が払われているのかという視点からこれまで検討を加えてきた³⁾。今回は、子どもの「精神」に関する「遊戯の歌」の個々の歌の内容検討の最終回であって、(42)－(50)の歌を取り上げる。

今回検討する(42)－(50)の歌は、「遊戯の歌」における子どもの成長の第Ⅲ段階と目されることは以下の(42)の歌の箇所でも簡略に言及するが、詳細については註4論文を参照していただくと幸いである。また、検討する視点に関しては「遊戯の歌」のこれまでの41編の歌と同様に以下の3点から検討することとする。

1. 主人公の子どもの発達の状況は、どのような表れに捉えられているのか。また、その発達の状況から、どのような「精神」的なことがらへと導かれているのか。
2. 子どもに語り聞かせるわけではないが、母親(両親、保育者)が心の内に持すべきこととして、どのようなことがらが語られているのか。
3. 方法的に注目すべきことがら、その他。

児 玉 衣 子

今回は、各歌の個別検討の最終回であって、まだ「遊戯の歌」および『母の歌と愛撫の歌』における「子どもの薄明るくなりゆく精神」の発達の把握およびそれに対する教育的関わりの全貌を伺うことはできない。しかし、これまでと同様、歌の配置に強調的構成を見て取ることができるので、そのことについては触れておきたい。

I 各歌の検討

(42) 「騎手とよい子」

「欄外装飾画の説明」（以下、「説明」と略記）は、冒頭に子どもとの遊び方を説明した後、次のように述べられる。「この遊びと、次の遊び（(43)「騎手とふきげんな子」……筆者註）とともに私たちは今や一步を進めて子どもの情操、性格、意志の訓練の段階に足をふみ入れる」⁵⁾。つまり3側面の内、子どもの「精神」に該当する内容において、この歌から新しい段階に入ることが宣言されている。同様のことは既に(11)「たてによこに」においても述べられていた⁶⁾。そこで(11)－(41)が「遊戯の歌」の中での第Ⅱ段階、そして今回取り上げる(42)－(50)が同第Ⅲ段階と見なされるわけである。

遊び方は次のように説明されている。すなわち、子どもは母の膝に乗っている。母は左手で子どもを抱き、右手の指を小指から親指へと動かして騎手の足踏みを表現し、歌の間中、近づいたり遠のいたりする。

1. 主人公の子ども

「説明」の最後の長詩に、子どもの様子が次のように描かれている。「その子はどんなに力強く、どんなに手や腕を動かして形づくり、建設しようとしたらろう、思慮深く自分の力を信頼しようとしたらろう……今や彼は走り始め、跳び始めた。……」。

今日でも、子どもは1歳前後になり立って歩けるようになるが早いか目を輝かせて、足を開いて歩くとも走るともつかないおぼつかない足取りで動き回る。そして、この歩き方の頃から既に、追いかけることも追いかけて息急き切って逃げることも大好きである。しかし、ここで捉えられている子どもの走る姿は、歩きと走りを区別してできる走り方であろう。田中によれば子どもが歩くこと、走ること、坂を上がることをでき、しかも方向転換も可能になるのは18ヵ月頃であり、この頃から足の土踏まずも形成されるという。また、階段等少し高い所からの跳躍に好んでチャレンジする姿は2才後半頃から見受けられ、ケンケンができ始めるのは3才頃からであるという⁷⁾。そして、それらをせぜにいられないようにして楽しむ内に、4才頃から次第にそれらの動きに加えて勝ったり負けたりというゲーム的要素をも楽しむようになっていく。

また、「手や腕を動かして形づくり建設しよう」とすることについては、わが国では近年の製作素材の豊富化が子どもの造形・製作意欲を大いに助けており、製作的活動はより低年齢化していると思われる。しかしそれでも、子どもの造形・製作の意図が大人にも明確に理解されるのは3才頃から

だろう。そして造形・製作が4才、5才と成長するにつれて発想、構成力、技術、仲間関係等の発達とも相俟ってすばらしい発展をみせるのを私たち大人は日常生活において目のあたりにする。

この歌の子どもは、もう既に一人で遊びを十分にする子どもである。しかし、まだまだ母親にくっつきに来る年頃でもある。フレーベルはこの歌の「説明」に次のような危険性を指摘している。「自己と他との分離が始まり、測量、比較、評定が子どもの内に始まる。同時に子どもは、これから漸くなるはずのものに、もう既に自分になっていると自分に信じさせたい。大人もまた子どもの中に漸く育ちつつある微弱な素質の今から愛するものを、実際の現在の彼と区別せずに彼にそう信じさせてしまう。これは私たちにも彼にも大きな損害だ」。

このような自己を強い、大きい、優れた者と信じたいという心の動きは、今日でも例えばTVキャラクターの真似になって表れたり、あるいは保育者が話そうとする内容を「もう知ってる」等と言って優越性を示そうとする日常場面などに見出されることになる。フレーベルが注意を促しているのは、今日の例でいうなら後者の場合であろう。そして、後者のいわゆる知ったかぶり、自慢等は、友達関係の発達とともに競争心も育ち始める5才頃から目につき始めると筆者には感じられる。

フレーベルは子どもが惹かれる騎士や騎手を次のように位置づけて、彼らの子どもへの影響を大人が意図的に望ましい方へ導くことを求めている。すなわち、騎士や騎手は自由な自決を表し、支配されず容易に屈しない、荒々しいが独立的な自然力を表す。それゆえに彼らは子どもの注意を早くから捉え、やがて魅惑的な美しさで模範ともなり、その判断や意見は子どもにとってとても重大である。このように述べて、フレーベルはそれに対して親の配慮すべき事柄を次項に挙げるように展開していく。

2. 親の心の内に持すべきことから

題詞では次のように歌われる。「子どもの中には人生は独りぼっちではないという静かな予感が隠れている。だから他人の判断に耳を傾けるのだ。母よ、だから気をつけなさい。子どもは真の生の呼び声を聞く新しい人生の段階を歩み始めている。純真な子どもの輝きを偽りで曇らせなさいよう、子どもが外面的なものに止まらないで内面的なものに優位を覚えるように努めなさい」。

そして「説明」では、さらに以下のように詳細に展開される。すなわち、幼児の生命の流れはまだ泉である。どこへでもそっと手で押す方へ流れる。後に大きくなってからでは親でも生命の流れの進路を決定できない。そして、子どもの心に善への尊敬、自ら善良であろうとする努力を喚起するのは、母親が他人の善に対して示す尊敬、称賛である。子どもの内なる善は確かに他人の好意、愛、尊敬、意見によって目覚まされ、発展させられるべきであって、他人の側、何よりも両親、中でも母親の側から子どもに対して次のように与えられるべきだ。

- (1) 好意や愛は、子どもが実際に善良である限り、善良であるためにのみ与えられているのだと感じるように。
- (2) 好意や愛は、表面的なその子に対してではなく、その子の考え方や内面の心の動きに対して与えられていると感じるように。

児 玉 衣 子

こうして子どもに他人の判断に対する注意が目覚めて注意するようになれば、親を始め子どもに影響を与える人は次のことを十分に注意すべきだ。

- (1) 子どもに対する判断や振る舞いにおいて、子どもの現在の姿と、将来なるであろう、あるいはなりうるであろう姿とをはっきり区別しなければならない。
- (2) 子どもの表面に表れているものや人柄を、子どもの内面的な発達の芽生えや考え方、目論みと明確に区別して、子ども自身が自分の小さな人間性について間違った考えを抱き、それを強めないようにしなければならない。

以上のように述べて、フレーベルは、子どもに英雄的存在への憧れが認められる頃から始まる新しい教育目標は大人の新しい役割でもあることを明らかにする。すなわち、この頃から子どもは内面的な心の働きの持つ価値に気づき、それを大切にすることを学ばなければならないが、それは英雄的存在への憧れに顕わになるにしろ、基本的には身近な親しい大人から学ぶことがらであることを明らかにしている。

3. 方法的に注目すべきことがら

上述2に重複。

(43) 「騎手とふきげんな子」

遊び方は前の歌と同じである。

1. 主人公の子ども

「説明」には、子どもの特徴が次のように述べられている。すなわち、子どもの無愛想、不機嫌、気難しさ、不満等は、しばしば肉体的不快ではなくあまりに激しい一面的な感動に原因がある。その感動が一面的であるために子どもを束縛して、子どもはそこから抜け出せないのだ。このような状況から子どもを救い出すためには子どもの傍に騒々しいものを持ってきても駄目で、予期しないもの、特に表れ方の印象的なものがよい。自分（フレーベル）の見た例では、興奮していた子ども達が不意に月を見せられて、あるいは日中、戸外へ出て鶏の活動を不意に見せられて落ち着き満了した。また、あるものが不意に姿を消すことも同様の影響を与えることができる。この遊びも歌もそういう理由で騎手と結びついている。

歌詞では、騎手が子どもに会いにくると、子どもは泣き喚いて暴れているので会えないことが母親によって告げられる。そうすると騎手が母親に向かって「それは気の毒、美しい歌で喜ばせたいが、よそでよい子を探そう」といって子どもに会わずに去っていく情景が歌われる。

つまり騎手が自由な自立的存在であるということは、彼は母親のように何とか子どもを宥めようとする存在ではなく、望ましくないものを容赦なく切り捨てる存在であることをも意味する。子どもは、自分の行為が好ましいものでなくても許される、いわば家庭内の甘やかされている立場から、

騎手によって、好ましくない行為は容認されないという客観的な判断とその判断の結果とを行為によって示されることになる。

ここに捉えられている気持ちの昂ぶった子どもの姿は、乳児期から2才の頃の多発する時期を経て子ども時代全般を通して認められるものである。特に2歳頃の激しさに関して、田中は、以前には「第1反抗期」と呼ばれた2才頃の幼い自我が目覚ましく成長する時期に多発する断固とした意志表示とその行動および立ち直りに健やかな成長への手がかりを見出している⁸⁾。しかし、フレーベルがこの歌で念頭に置いているのはもう少し年長、すなわち騎手によって切り捨てられることによって自分自身を省みることのできる年齢に至っている子どもだろう。

保育の立場からすれば、この歌は発達心理学と保育との相違を明確にする歌でもある。つまり、発達心理学がなぜ子どもにこのような言動が生じ、発達にどのように位置づけるのかを問うのに対して、保育では子どもがなぜこのような言動をとるのかを知ろうとしつつ、同時にそれらの言動が自分自身と周囲にいる人間にとってどのような意味を有するのかを本人にも確認させ、それによって社会に生きる人間としての成長を図るという性格をもつからである。

その意味で、本歌が示す一種の自己客観化を要求する大人の関わり方は、幼い自我が幼いなりに自己客観化（他者への配慮としても表れ始める）を見せる頃から効果的になるといえるだろう。

2. 親の心に持すべきことがら

題詞には次のように語られる。「善は人間を引き寄せ、悪を善人は逃げることを早くから子どもに見させよ。生の幸福を作るように」。そして、続く子どもの歌では、上述のように、泣き喚き暴れている子どもには、騎手は会わずに去っていくことが歌われるわけである。

この発達段階に至った子どもには、自らの行為を他人の評価を通して自己客観化するという理性への第一歩とその方策が与えられる。それはまた社会的自我を作っていくことでもあろう。そして、他人（ここでは騎手）の評価は他人の評価であるゆえに無条件に尊重されるというのではない。彼は善悪という価値判断の具現者として尊重される。その際、他者の判断をさらに判断して子どもに取り次ぐ親がいて、子どもは初めて社会的善悪への理解を開かれていく。

3. 方法的に注目すべきことがら、その他

上述2に重複。

(44) 「ぼうや かくれなさい」

遊び方は前の2つの歌と同じ。母が子を隠す、あるいは子が母に隠れるやり方は今更誰も教えることではない、と語られている。

1. 主人公の子ども

児 玉 衣 子

「説明」で母親にむかって次のようなことが語られる。すなわち、この遊びは子どもに母親との心の結合、精神の結合を感じやすくして、子どもの内的生命を一層深く掴む。この結合を感じるのに、常に同一媒体（ここでは騎手）を経ることは極めて大切だ。そうでなければ、あなたと子どもとの結合は往々にしてあなたにとっても子どもにとっても肉体的、道徳的、精神的な癒着になる。癒着の発生は避けられなければならない。

この注意は、これまで「生命の一致」（*Lebenseinigung*）の内容を母と子の一体感を主に語ってきたフレーベルしか知らない我々読者に対して、彼が自ら唱える幼児期の教育の「子どもの成長に従う」という内容の複雑さを新しく示したものと見える。ここに捉えられているのは、親自身も子どもの成長に従って変化を要求されることの確認である。それは幼児期の自我の成長に従うゆえに要求される。そして「生命の一致」とは、成長に伴って生じる母子分離という新しい局面に際して、新しいあり方で親子共々に確立されていくべきであることが明らかにされる。しかも、これから本格化する分離に際して、子どもの成長に応じた「生命の一致」を深めていくには、常に変わらぬ媒体がなければ母子癒着の生じることがこの歌で明言される。そして、その媒体として騎手が挙げられている。

(42)(43)の騎手は、子どもの憧れる強さ、正しさ等の具現者であり、また客観的判断とそれに基づく行為の具現者であった。この歌における騎手はそれらのイメージに加えてさらに別の側面をも見せる。すなわちこの歌の騎手は、彼らにとって良い＝見込みのある子どもであると判断すれば、子ども自身の気持ちなどには頓着せず一方的に彼らの義（よし）とする方向へ子どもを連れていこうとする大人の意志の体現者である。旧教育のあり方でもある。

このような騎手に対してフレーベルは母親を対峙させている。母親はこれまで子どもの成長を注意深く保護しながら導いてきた。そのような母親であればこそ、彼女は、騎手に象徴されるところの一方的に自分の価値観やペースに巻き込む大人に対して子どもが本能的に抱く怯えや圧迫感を理解し、それから子どもを守る。フレーベルはそれを義（よし）とする。しかも、このように子どもと生命を溶け合わせて子どもの成長を理解し導いてきた母親であればこそ、子どもがある程度まで成長したときに陥る危険性として、フレーベルは、ここから母子癒着の危険性を挙げるのである。

2. 親の心に持すべきことから

題詞は親への語りかけを強調して次のようにいわれる。「人は誰でも(Man)善いものごとを大切にしなければならぬ、それを子どもにも出せなさい。あなた(Du…太字強調)が善を尊ぶことを知っていることによってあなたの子の心に栄養をとらせなさい」。つまり、親の言動に表れる価値観を子どもは吸収して成長する、それがいよいよ本格化する時期に入っていることを親に対して語り、注意を呼びかけているわけである。

この題詞での親への語りかけは、「説明」になると上述の癒着の警戒に続いて、さらに詳細に解説される。すなわち、あなた(親)が何を尊敬し何を軽蔑するか。何を尊重し何を軽んじるか。どのようにそれを尊敬・尊重し、どのようにその尊敬・尊重を育て、用いるか。あなたが自分の中で、

家庭で、子どもに対して（どんなに小さくて理解できないように見えても）、この尊敬・尊重の点でどのように振舞うか、これこそ子どもにとって目立たないが効果のある教育および教育手段として極めて重要である。

あなたと子どもとは互いに互いの全てである。だから、感情の面だけでなく、ものの考え方においても、行動の確かさにおいても互いに相手の全てであってほしいものだ。感情はまた限界を越えて盛上がらせられると誤解されることがありうるし、そうになると子どもにとってもあなたにとっても、むしろ有害になってしまうものだ。

以上のような語りかけによって、フレーベルは両親が自らの生き方を規定する自身の価値観を改めて意識化し、自らの価値観を自覚して育てることを求めている。その意味で、この歌は子どもとの遊びであるとは言いながら、むしろ両親自身に求めるものの方が大きい歌であるといえる。

3. 方法的に注目すべきことがら、その他

「説明」の最後は母と子の会話形式の短い詩である。その一節に次のような語句がある。

「なぜ騎手はその子を欲しがったの？」

「それは その子がよい子だから。だから母さんも好きで騎手にやらなかった。見せもしなかった。」

(42)(43)の歌において、騎手とは自由な自決を表し、容易に支配されない荒々しい自然力と説明された。今日でも例えばTVキャラクターを真似て「ヘンシーン」したり、それらを飽きずに描いたりするところに子どもの憧れは認められる。

しかし、ここに描かれている子どもと母親の姿は、騎手（に象徴されるもの）の強さ、眩しさ、荒々しさ等の刺激が子どもに強すぎる場合、本能的に子どもは避けよう、隠れようとするが、それを無理強いして直面させるようなことではないこと、むしろ、子どもの恐怖心を煽ることの無いように保護することが基本であると語られていると見ることができる。

また、幼児の教育とは、イベントやショー的な外からの企画に自分の感情の波を委ねさせるもの、けたたましく子どもの感情を揺さぶるものとも異なり、生活の中の、子ども自身の自然な感情の揺れの範囲にあって営まれるものであることも、母親の姿から浮かび上がる。

(45) 「かくれんぼ」

1. 主人公の子ども

題詞には「なぜ子どもはかくれんぼをあんなに喜ぶのか？あなたの子を喜ばすのは人格の感情だ。自分の名前が呼ばれるのを聞く時、自分を認識する感情だ。だから、かくれんぼを喜ぶのは新しい発達段階に達したのだ。今からは注意してそれを守れ、この感情のまわりにはさまざまな危険が漂うから。今、子どもの内に慎重さと道義心と信頼と正直とを目覚めさせることができる。それがいつまでも根づくようにしてやりなさい。子どもは自分の行いを決してあなたに隠してはならない」と語られる。

児 玉 衣 子

かくれんぼの一種、いないいないの遊びは乳児期から好まれ、1、2歳児でも大人が隠れるのを探さかくれんぼは好きである。3、4歳頃の子どもの場合、鬼の役目は果たせなかったり、鬼があたると途端にベソをかいて遊びが立ち消えてしまうが、自分が隠れて（隠れたつもりで）それを見つけてもらうかくれんぼは好きである。しかし、かくれんぼであれ鬼ごっこであれ、子どもがゲームの鬼を引き受けることができるようになると、確かに発達の新しい段階に達したと傍から見ても感じられる。経験的な目処であるが5才位以降と思われる。

隠れていたものが見つかる喜び、隠れていたたいが見つけられることも喜び、そういう人と人との関係が育つための基本は自分の名前が呼ばれることである、とフレーベルは述べる。「私」という自己感情は、生後数か月の名前を呼ばれると笑顔で応え始める時期から育まれると『人間の教育』で既に述べているが、フレーベルはこの歌の時期に至った子どもにおいて、特に、隠れていたのが見つけられて名前を呼ばれた時の一種名状し難い高揚感によって、後ろ暗さのない晴朗な「私」という自己感情の育ちを図っているわけである。

2. 親の心に持すべきことがら

子ども向けの歌は、以下に見るように大人の自戒のこもる歌詞である。「可愛い坊や、どこ、おいしい。誰か知ってる 坊やはどこ。ずっといない そこにいたのに いらないいない。坊やを見つけた方には立派なお礼をあげましょう。坊やがいた。心にこんなに近くいた。世の中にはこんなことがよくある すぐ目の前の見えないことが」

また、遊び方自体も「説明」によると母親の胸や頸、両腕の間、マントや前掛けの下、膝に隠れるとされているので絵の子どもは1、2才から3、4才までの子どもかと思われる。

フレーベルは、かくれんぼという遊びについて、このような年令の子どもとともに、もう少し大きい兄弟姉妹にとっても常に新しい尽きることのない魅力のあることを述べている。その魅力を、フレーベルは「子どもの全ての配慮は、どれほど注意して隠れようとも、子どもがあなたを再び見出すだろうという喜びを前以て持っていることを表している」と語っている。また、なぜ隠れるのか？この問いに彼は「子どもが隠れるのは深くあなたと一致しているという、そしてこの一致をよく意識するという、常に新しく高まる喜びのためだ」と述べている。

そこからフレーベルは、母親の心遣いとして再び見つける喜びを高めなければならないという。それは、この外的な分離（親の目から離れること）は偶然の機会に不意に、子どもの心に親から隠しておきたい行為の入り込む危険性を有しているからである。だから、この危険を避けるためには、外的分離が大きくなるにつれて、正しく培われた内的な一致の感情もそれに相当するだけに増大すること。分離すら一致を欲する。一致のみが目的だ。子どもを育てる者よ、この法則を学べ。以上のようにフレーベルは語るのである。

この「説明」には、次の10語の強調語があり、強調語の多いことがひとつの特徴になっている。

太字強調……Du（母親にむかって）

das（前の句である「高まる、いわば拡大する外的分離と、正しく認識され、正し

く培われて直接に結びつけられた内的一致の増大」をうけて、「これこそ」と訳される)

隔字強調……Handlung, wieder, Wiederfinden, Wiedersehen, ausserun, Steigerung der inneren Einigung

また、フレーベルから母親への呼びかけに際してつけられる形容詞についても、本書中最多の形容詞がつけられて次のようである。「思慮深い、敬虔な、神に忠実な信仰深く帰依した母よ」。

さらに、この強調は絵においても、低い丘陵から昇る朝日を全身に浴びてすっきりと立つ母親(赤ん坊を肩に抱き、もう一人の幼子はスカートに纏わりついている)という、本書の表紙をも含めて絵全体の中で最も晴れやかな印象的な母親像によって視覚化されている。

本書の各歌の「説明」全体が母親主体の大人に対する解説であるとはいえ、この第Ⅲ段階(42-50)に入ってから「説明」は、それまでと比較すると子どもに関する説明が少なく、それまで以上に母親への語りかけが目立つ。その中でも母親に語りかける姿勢の強さは、この歌において最高潮に達した感がある。

3. 方法的に注目すべきことがら

上述2に重複。

(46)「かっこうかっこう」

1. 主人公の子ども

遊びはかくれんぼの一種で、逃げ手が「かっこう かっこう」と鳴きながら逃げ、探し手はその声を頼りに探すというものである。前の歌のかくれんぼよりも後になってできるようになる遊びである。現在の日本では同類の遊びとして目隠し鬼ごっこが挙げられる。

2. 親の心に持すべきことがら

フレーベルは、この遊びをかくれんぼの一層の発展としており、発展の内容を次のように述べている。すなわち、前の遊びでは分離と一致とをよりくつきりと経験するため、それらが明瞭に分かれているのに対して、この遊びでは分離と一致とが仲介され分離の中の一致、一致の中の分離が経験される。これこそが子どもを喜ばせるものだ。分離の中の一致、一致の中の分離とは、すなわち個性の感情と意識であり、また良心の本質であり深い土台である。この快活なかっこう遊びを楽しんでいる子どもには、もう良心の呼び声がかかっているのだ。そして全生涯を通じて、その快活な良心の呼び声が、やがて来るより高い霊の一致、精神の一致、最高者とさえ一致する予感だ。子どもは決してもう分離されないと感じて、おそらく幸福と祝福、平和と喜びを持つだろう。

以上のようなフレーベルの叙述から私たちは次のようなことに気づく。すなわち、かくれんぼを楽しむ始めること自体は子どもの自我の成長という心理的状況である。子どもの心理的状況から教

児 玉 衣 子

育へとフレーベルは進めるのであるが、その際、彼は自我の成長を分離（孤独、心細さ、わかってもらえない、気づかれない等）の意識化という人間の根源的な生の意識と結びつけて把握している。しかも彼は、幼児において既にこの分離は意識されて生きているということを洞察している。そこから彼は、人間は分離されているように感じて決してそうではなく、一致できる（ひとつになれる）対象を持っており、この対象が広がり、目に見えない対象とさえひとつになれるということは既に幼児期から予感されている。その対象に順次気づかせ一致を経験させるのが乳幼児教育であるといっているのである。

(35)「小さな橋」においては仲介機能を果たすものとして小橋（視覚的に見えるもの）が示された。この(46)「かっこうかっこう」になると、人間の生の根源に関わる分離と一致を仲介する機能を果たすものとして、内在する人間の良心が挙げられる。そして、良心の成長と人間の成長とが結びつけられて、良心の成長が遊びの内に図られること（発達の状況から教育目標の設定とその実践化）が大人の責任とされるのである。

さらに、本第Ⅲ段階の目標として提出されていた「子どもの情操、性格、意志の訓練」との関係でいえば、フレーベルは「情操、性格、意志の訓練」を人間の良心の成長という点から重視しているといえる。人間は成長するにつれてその人の良心が「分離」と「一致」とを仲介して「生の合一」(Lebenseinigung)を齎らすようになると彼は理解している。だから「情操、性格、意志の訓練」がこの時期の中核とされるのだろう。フレーベルの求める人間形成の土台にふれる思いがする。

3. 方法的に注目すべきことがら

この段階では、既に述べたが、子どもに関する記述よりも、親に対する語りかけの分量の多い歌が多い。それらの親の役割と子どもとの結びつきによって、子どもの情操、性格、意志の訓練が図られる。しかもこれらの訓練は子どもの内に形成される人間の良心を形成すると語っているという点で、この歌がこの段階の中心になるだろう。

(47)「店屋と女の子」(48)「店屋と男の子」

遊びは図に示されるように指の役割分担が多い。すなわち、両親指が親子連れ、人差し指が店屋の商品台、片方の小指が店屋の主人、残りの指が店屋の屋根になり、主人と親子連れとの会話が交わされる。本書中、各指の動きの最も分化された遊びである。フレーベルはこの遊びについて「この遊びの姿勢は必ずしも難しくはないし、また広く知られてもいる」と述べている。

1. 主人公の子ども

歌詞では、有名なドイツのクリスマスの歳の市が設定されて、そこへ連れて行ってほしい子どもが描かれる。子どもは店屋へ出かけて心を躍らせるものを見たい、そしてクリスマスには幼な子イエス（日本ではサンタクロース）からプレゼントを貰いたい。そこで自分の欲しいクリスマスプレ

ゼントを取り次いでもらうために、子どもは見知らぬ大人である店屋の主人に向かって、自分がよい子であること、プレゼントに何がほしいのかを勇気を奮ってきちんと伝えなければならない。つまり子どもはそれを行う位までに成長している。つまり、見知らぬ相手に対しても自分の希望や意見をきちんと伝えるという自立した大人へ向けての第一歩が、クリスマスプレゼントという大きな期待に支えられて踏み出されるわけである。

2. 子どもに教えるわけではないが、親の心に持しておくべきことがら

「外面的な生活もその権利を持っているし生活の市場もそうである。人（子どもも含む）は自分の内にはっきりと自己を認識したならば、生活に足を踏み入れることができる。そして生活に必要なものを自己の本質や要求と関係させて選び、自分のものにすることができる。そして、この内面的な真に敬虔な喜びは、どんなに些細に見えようとも、本来、生活の市場を訪れた者がぼんやりと予感した目的であり、子どもが市場訪問を気に入る根底になっているものである。だから、これを子どもに生き生きと感じとらせてあげよう。そうすれば市場を訪れる人は美しいもの、また生活や性や職業の求める有用なものを選択することができるようになる。女の子、娘、主婦、母親が家政や家庭生活に役立つもの、優雅なもの、やさしいものを選ぶのにたいして、女の子たちを守るために男の子、青年、大人、父親といった人たちは力あるもの、強いものを選ぶ。そこに生活のハーモニー、外面的な均整、内面的な一致が生じる」。以上のようにフレーベルは語る。

そして、以下、要約することもできない簡明さで彼の持論が次のように述べられる。「こうして外面的なものの中に内面的なものを予感し、分かれたものの中に一致したものを予感し、多種多様なものの中に統一を予感し、特殊なものの中に普遍的なものを予感すること、生活を写し絵の中に眺め鏡に写し出して眺めること、自己を鏡に映して眺めること、このようにして生活を知り、自分自身の内面的生活を自分の外に表現する手段を見つけること、これこそ市場訪問に無意識に心惹かれたり、そうしたい衝動に迫られたりする原因である……」。ここには(7)「草刈り」(12)「お菓子づくり」(13)「鳥の巣」(15)「はとの家」等でそれらの場面を例に語られた彼の考える人間の生きる意味が、一般化され要約されて語られている。

同時に上掲の既出歌とこの(47)(48)の歌との違いは、今回の歌になると主人公の子どもはもはや幼児ではなく少女、少年と呼ばれるように性、職業、生活等を担って生きていく年齢になるとされている点である。このゆえに、これまでも語られてきた分離と一致、外面と内面、特殊と普遍に、今回から性、職業、生活等に伴うそれらが含まれることになる。この分離と一致の新しい側面に相対して生きていく人間の営みに、以降、子どもが入っていくようになることへの配慮が、ここに語られているといえるだろう。

3. 方法的に注目すべきことがら

既述論文に重複⁹⁾

児 玉 衣 子

(49)「教会の扉と窓」

遊びは両腕を立てて教会の柱に見立て、4本指は広げ重ねて屋根と窓にする。両親指は立てて鐘楼に見立てる。

1. 主人公の子ども

歌詞では次のように歌われる。「明るく輝く窓をご覧 小さな教会の中へ光がさしこむ 大きな扉をご覧 小さい教会に入れる けれども入る者は静かに気をつけよう [心の奥に起ることがここで大事に養われ お前の心が予感するものを見つける道が開かれる 花や小鳥を養う方が幼子キリストを語るだろう 花や小羊と遊ぶ時 月や星を喜んで見る時 父さん母さんに頼る時 心に感じることの意味が示される] 大きければお前もお入り オルガンの音を楽しもう ルロラ ラルロラ また打つ鐘の澄んだ音が塔から響く ああ美しい ピムパムパウム 耳から心へしみわたる ああ なんてうれしい ピムピムパウム ラルラ ラルロラ 」

この歌詞によって教会に入ることを誘われていることを感じとり、それを自覚して教会堂の中へ入り静かにしていただけるのは、幼児期も後期だろう。

「説明」の中でフレーベルは、「子どもは生活の多様さの中で、全く無意識に一従って誤解することもしばしばあるが一予感し探求するものが生命の一致と調和を示す場合、一層喜んでこれを感じ、この一致の中に生きる。前の遊び((47)(48)の歌……筆者注)で示した新しい発達段階 に達してからは、寄り集まって、よく考え、協議する集会在、子どもにこれを与えてくれる」と述べている。つまり、市場へ連れていってもらって、親や店主の助言を借りながら自分の欲しいものを選び、幼な子キリストへの取次も頼める位に成長するということは、寄り集り、よく考え、協議する集会在が興味をひくようになっていくというのである。

子どもの傍にいる大人にとって、まさに子どもが寄り集まって仲間を形づくり、協議し、自分たちの共同性を育てていることが傍目にも感じられる時期に関する導き方である。ここでも人間関係が人間関係だけの育て方、発展のさせ方にならずに、超越的存在と関わる雰囲気の中で人間関係の育て方も学ばれるべきであるというフレーベルの主張が認められる。

2. 子どもに教えるわけではないが、親の心に持すべきことから

上掲の発達段階に入って、初めて子どもは教会の中へ導かれるのであるが、それは、宗教の教理を教えるためではない。上掲のような性格をもつ集会在、すなわちすべての人々が集い、話し、歌い、しかもその話し、行い、歌うというすべてのことにひとつの共通点、一致させる点がある、そのような性格が教会に見出されるからである。だから子どもは一時期ではあっても実際に教会へ行くことを好むのであるとフレーベルはいう。

しかし、これは子どもの問いを拒否することではなく、子どもが言葉や話の意味を尋ねてきたなら、その子の経験や感情や観念、あるいは発達や必要に応じて答えてあげなくてはならない。この

歌は子どもの発達の初期の段階と後期の段階のために、この暗示を与えている、ともフレーベルは語る。

第Ⅲ段階の遊びは、これまで見てきたように、遊び自体は幼児期前期から後期に至るまで幅広く遊べる性質のものであった。しかし、「説明」の内容は、幼児期後期の子どもを対象にしていた。この意味で、特に(1)－(10)の歌が、主人公の子どもの年令を2層構造にして解説していたのとは根本的に異なる。

つまり、フレーベルはここで、「子どもの情緒・性格・意志の訓練の段階」の幼児期の最終的な内容を語る。しかし、遊び自体はもっと早くから遊べる遊びを入れている。そこでそれらのより幼い子どもへの配慮が、教会という注入教育の最たる場でもあった所へ子どもを導くにあたり、上掲のように改めて提出されたと思われる。

その注意を確認しながら「多数の中に調和音が示される場所、それが形と音に表れるところへ、子どもの心は早くから傾きます。それを大切に育てることを、両親たちよ、忘れないように」（題詞）と語られ、あるいは、「子どもの予感を実現すること、心の中に響いて生活に反映する調和、生命の統一、根源との一致と調和、つまり神との一致と調和を忘れないように」と、親の生き方が子どもの予感を育てることが語られるのである。

3. 方法的に注目すべきことがら

特になし。

(50)「小さな画家」

遊びは、子どもが母親の膝に乗っているような時に、母親の人差し指、あるいは子どもの人差し指で、空中に、あるいは板に広げた砂の上に、お話しにつれて、登場するものを次々と簡単な絵で描いていくものである。少し大きい子どもには石盤でもよい。また砂、石盤、空中と進んでもよいとされる。

1. 主人公の子ども

題詞に「あれ、あの小さな子どもが もう絵かきになるって」といわれる。そして本書中に描かれているのは、一筆書きのような小さく描かれたさまざまな事物である。このような形態の特徴を捉えて類型化した小さな一筆画を描けるのは、今日でも6、7才位以降と思われる。

2. 親の心に持すべきことがら

題詞に「子どもの力は何もできないように見える、少なくともまだ目立たないほど小さい；しかし至る所で大きな創造をしているものは何だろう、あなたはそれを最も小さなものの中に発見するあなたの周りの全ては、測り知れないほど大きくても、すべて常に最小のものから生じる……すべ

児 玉 衣 子

てを創った神はそれを無から呼び出した、神は言わなかったか、どんな些細なことにも誠実であれと；それなのに あなたは子どもの中のこの呼び声を理解しようとはしなかったのか？この場合は違うというのか、だから両親よ 子どもの目立たない力を誠実に育てることを最も重要な仕事としなさい」と語られる。

フレーベルはこの歌の「説明」の中で、既に子どもは自分の内にひとつの小さな世界を築いている、そしてその世界を自分の気に入った方法で表現したがっている、という。この表現したい欲求に対して、描画という手段は、子どもの内に潜む創造力を発揮する手段になるとフレーベルは述べるのである。彼は既に『人間の教育』（1826）において創造性は神の本質であり神の像（かたち）に創られた人間に与えられた神性の本質でもあるということ述べている¹⁰⁾。この確信は晩年の本書においても変わらず、子どもを誕生以来手塩にかけて育ててきて少年・少女期に入った最後のこの歌において子どもの創造性に言及されるのである。

しかも、この歌の「説明」において、フレーベルは創造性をいわゆるモノを創りだすことに限定せず、次のように神との関係における人間の倫理面と結びつけている。すなわち、「何よりもまず第一に、創造者を早くから認識しようとする者は、早くから自分自身の創造力を、意識してよいものの表現のために練らなければならない。なぜなら善いことを行うことは、創造されたものと創造した者とを結ぶ紐であり、それを意識的に行うことは意識的にその紐を結びあわせる、人間と神との生気あふれた一致であるからだ。これは個々の人間の、いや人類、人性の、そしてあらゆる教育の出発点であり、永遠の目標であるといえる」。

以上のように、幼児期から少年・少女期への移行期以降の子どもの表現への意欲、創造性への要求は表現自体にとどまらずに倫理面と結ばれ、人間の本質を育てるという彼の『人間の教育』の主張とつながっていくことに気づくとき、本書は乳幼児教育としてひとつの纏まりを見せながら、その纏まりは完結する性格のものではなく、『人間の教育』へとつなげられていることを感じさせられる。

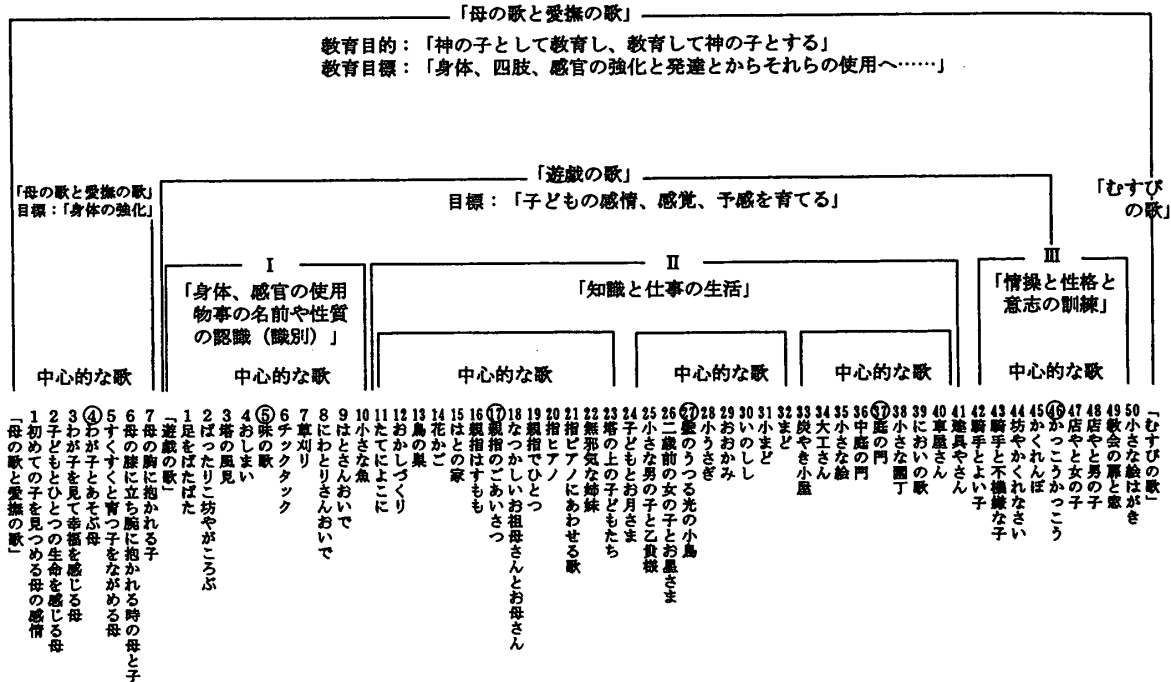
3. その他、方法的に注目すべきことがら

上述2に重複

II 「遊戯の歌」第Ⅲ段階（(42)－(50)）の構成上の特徴

これまでの(1)－(41)の構成にみられた特徴、および上述にあげた特徴から、第Ⅲ段階における中心的（強調的）な歌として(46)の歌が挙げられる。第Ⅲ段階および「遊戯の歌」全体を図示すると、以下のようなになる。

図



註

- 1) F. W. A. Fröbel, Mutter- und Koselieder, Bl. 60.
- 2) dito, Bl. 60.
茅野蕭々訳『母の歌と愛撫の歌』岩波書店、1934、133頁参照。
荘司雅子訳「母の歌と愛撫の歌」『フレーベル全集』五巻、玉川大学出版部、1981、256頁参照。
なお、以下、本書の引用に関しては上掲二書を用いさせていただいた。
- 3) イ) 拙論「『母の歌と愛撫の歌』における動作の系統性」『日本保育学会第41回大会論文集』1988。
ロ) 拙論「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』における子どもの『他者との人格的關係』の発展」『人間教育の探求』4号、日本ペスタロッター・フレーベル学会紀要、1991。
ハ) 拙論「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討—子どもの『薄明るくなり始めた精神の認めること』について—」『乳幼児教育学研究』1号、日本乳幼児教育学会紀要、1992。
ニ) 拙論「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討—『遊戯の歌』(1)-(10)に見られる子どもの『精神』の成長—」『北陸学院短期大学紀要』25号、1993。
ホ) 拙論「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討—『遊戯の歌』(11)-(23)に見られる子どもの『精神』の成長—」『北陸学院短期大学紀要』27号、1995。
ヘ) 拙論「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討—『遊戯の歌』(24)-(32)に見られる子どもの『精神』の成長—」『北陸学院短期大学紀要』29号、1997。
- 4) 註3 論文ハ参照。
- 5) dito, Bl. 73. 「子どもの情操・性格・意志の訓練の段階」……「die Stufe der Gemuths-, der Charakter und der Willensbildung des Kindes」
- 6) dito, Bl. 60. 註3 論文ハ参照。
- 7) 田中昌人・田中杉恵著『子どもの発達と診断』3巻、大月書店、1984、16-17、68-75、172-177頁等参照。
- 8) 同上、126-132頁参照。
- 9) 註3 論文ロ参照。
- 10) 荒井武訳『人間の教育』（上）、岩波文庫、1964、49-57頁参照。